





## 世界史 B 問題

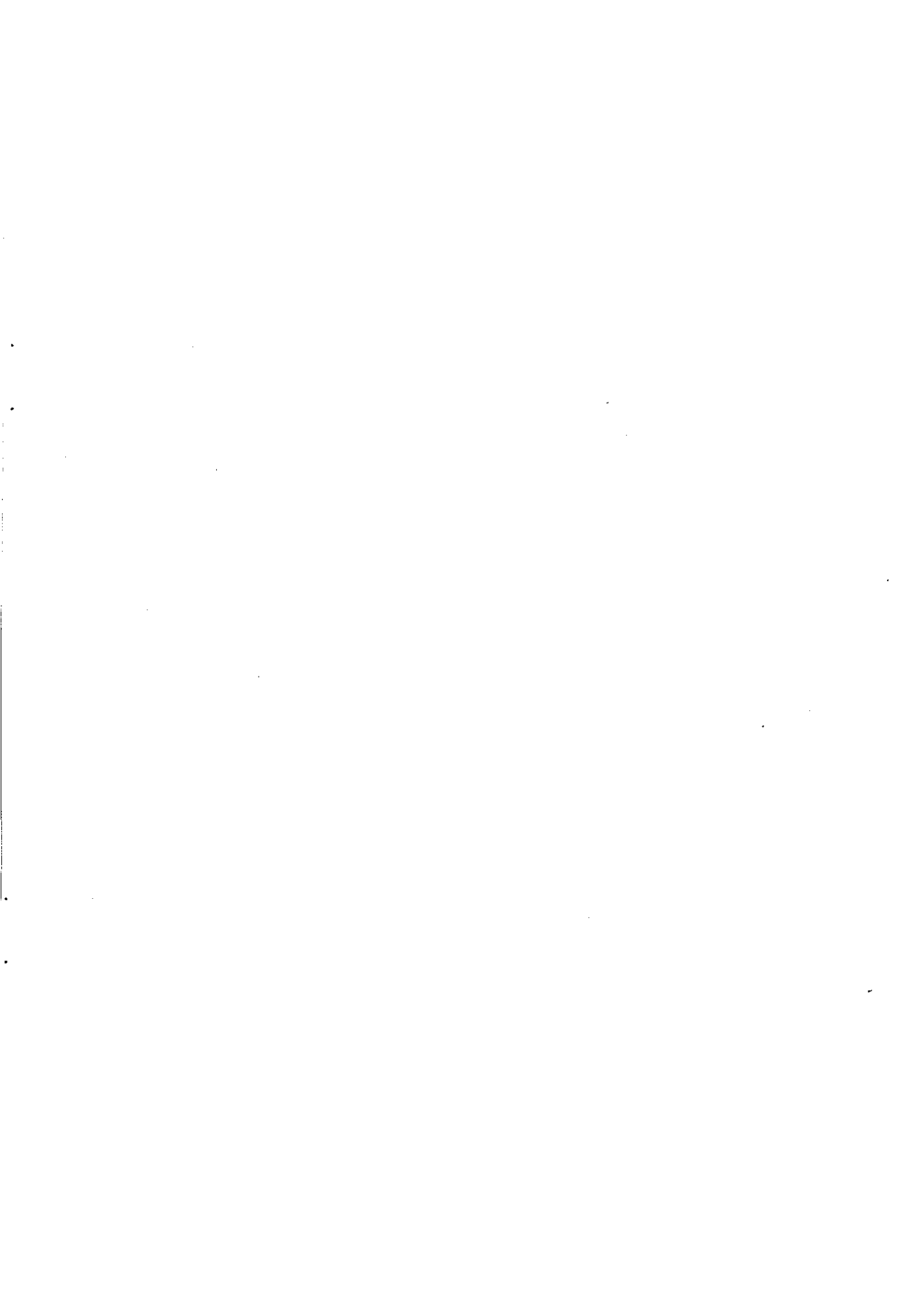
はじめに、これを読むこと。

1. この問題用紙は、17 ページまでである。ただし、ページ番号のない白紙はページ数に含まない。
2. 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合し、確認すること。
3. 解答用紙の所定の欄に氏名を記入すること。
4. 解答は、すべて解答用紙の所定の欄にマークするか、または所定の欄に記述すること。
5. 解答は、必ず鉛筆またはシャープペンシル(いずれも HB・黒)で記入しなさい。
6. 訂正は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。また所定以外のところには、絶対に記入しないこと。
8. 問題に指定された数より多くマークしないこと。
9. 解答用紙は、持ち帰らないこと。
10. この問題用紙は、必ず持ち帰ること。
11. この試験時間は、60 分である。
12. 解答をマークする場合の注意。

(マーク記入例)

良い例	悪い例
	  





〔 I 〕 次の文章をよく読み、下記の設問に答えなさい。

北方から金の攻勢の前に、首都を落とされ、 (在位 1125～27 年)を失った宋は、皇室の一部が南渡し、臨安を首都として、南宋を樹立した。五代十国期に、呉越・南唐など江南に樹立された各王朝は、それぞれ農業や商業の発展に努めたが、その趨勢は宋代になっても衰えぬばかりか、宋の南渡以後いよいよ強まり、江南は中国経済の最先進地域としての地位を確立した。

五代十国以来、江南のデルタ地帯を中心に、低湿地を堤防で囲んで干拓した・圩田・湖田とよばれる水利田が、寺院や官戸・形勢戸など地主層の主導によって造成された。さらに、北宋時代に渡来した稲が、広く普及し、米作地帯として江南は多くの人口を支えることになった。また農法の改良も進み、一年二期作や一年二毛作が広がり、江南農業の発展ぶり、その生産力の高さは「蘇湖熟すれば天下足る」と称された。

明代に入ると、王朝の財政基盤を支えるべく、華中・江南に重い負担が課された。さらに多くの農民は小作人であるとして、地主に収穫の半分にも**<sup>b</sup>**のぼる小作料を納めなければならなかった。明代中期、江南において綿花栽培が盛んとなり、農民たちは副業として、綿織物や絹織物に従事するようになった。手工業の発展にともなって非農業人口が増加し、そのうえ綿花や桑の栽培のため、水田が減少した。その結果、中国最大の穀倉地帯であった江南は、食糧を他の地方に頼らざるをえなくなった。16 世紀初めには、長江中流域が新たな穀倉地帯として台頭するにいたる。

江南を中心とした手工業の発展は目覚ましく、江南の諸都市の手工業のなかには、マニファクチュア的な生産形態といえるものもみられるほどであった。四川や福建では茶の栽培が広がり、景德鎮を中心とする陶磁器生産も発展した。このような手工業の発展を背景として、そこで生産された商品を運ぶ商業網も発展し、遠隔地間取引に携わる商人たちも台頭してくる。それら商人たちの中では、安徽省南部出身の<sup>c</sup>が有名である。彼らは揚州の塩商として財をなしたが、彼らが扱った穀物、絹織物、綿布、茶などといった商品から、彼らの活躍が江南経済の隆盛を背景としたものであったことがわかる。

江南でつくられた優れた製品は、中国国内で販売されただけではなかった。景徳鎮に代表される磁器は、東南アジア、インドから西アジアまで送られている。蘇州など江南で織られる絹織物も海外で評判となった。それらの貿易には、中国・朝鮮・日本の商人ばかりではなく、東南アジア・インド・アラビアの商人たちも携わっていたが、16世紀には、ポルトガル・スペインなどヨーロッパ人も加わった。商品の対価として、日本人が日本銀を持ちこんだように、スペイン人やポルトガル人は、新大陸から、メキシコ銀を持ちこみ、中国国内における銀の流通を助けることになった。このような傾向は、近世以降、ヨーロッパにおいて飲茶の習慣が広がり、中国茶への需要が高まるにつれ、いよいよ顕著となった。

このような社会の大きな変動は、明代後期から明末にかけて、社会のさまざまな方面に影響をもたらすことになった。税・徭役・小作料など重い負担に対する農民の抵抗が激しさを増した。とくに小作料の減免を求める **カ** 運動の激化となって現れた。さらに明朝は宦官を派遣し、都市の手工業者から厳しく税を取り立てたため、江南各都市を中心として **キ** と呼ばれる暴動がおこった。

満州族による中国支配のもとにおいて、清朝は鄭成功など反清勢力の活動を排除するため、沿海住民の内地への移住を強制する **ク** を出すなど、海禁政策を強化した。それは、1683年の台湾平定以後、廃止されたが、清朝の、外国との通商を厳しく統制しようとする姿勢には変化がなかった。1757年には、ヨーロッパ人との貿易を広州一港のみに限定する、カントン・システムが成立した。

明代以降の国外からの銀の流入を背景に、諸税を銀納させ、徭役を銀で代納させる税制への変更がはかられていく。それは最終的には、18世紀前半、康熙帝のもとで施行が開始され、雍正帝のもとで全国に広がった **ケ** に結実した。銀納が定着すると、農民たちにとって銀と銅銭との交換比率が重要なものとなっていく。銀が不足すれば、銀の価値があがり、銅銭の価値が下がることになる。日ごろ銅銭しか手元がない農民たちは、諸税の銀納のために、より多くの銅銭と交換して銀を入手しなければならなかった。逆に銀が大量に出回り、銅銭の交換比率が良くなれば、より少ない銅銭で銀を入手することが可能となった。ま

さに農民たちにとっては、銀不足は死活問題であった。

銀の中国への流入はヨーロッパ諸国にとっては銀の流出であった。中国から茶を得るために、何を対価として持ち込むかが問題であった。当初、産業革命中のイギリスは、母国の工場が作り上げた諸製品を持ちこむことを考え、カントン・システムの変更を求めた。だが、乾隆帝にあっさりと、「地大物博」の中国は、満ち足りていて貿易は必要ないが、相手国のために恩恵として貿易をしているのだ、と自由貿易を拒絶されてしまう。歴代王朝の伝統的な<sup>d</sup> コ 貿易の維持こそ、清朝の政策であった。結局、イギリスが選んだのは、インドで生産したアヘンを中国に持ち込むことであった。清朝はアヘンの輸入を禁止したけれども、密貿易が横行し、中国のアヘンの輸入額は茶の輸出額を上回ることになる。いまや、銀が中国から流出する事態となった。流入するアヘンの増大とともに、銀が不足していく。農民の動揺が始まった。

この清朝とイギリスの間の軋轢が増大し、アヘン戦争が勃発した。その結果、清朝は南京条約によって、上海以下<sup>e</sup>五港を開港し、西欧列強の貿易要求に応じることになった。開港された上海、広州、廈門などは、単なる寄港地ではなく、同条約によりイギリスに割譲された香港などと同じように、西欧列強の通商の拠点であった。中国側が厳しく貿易を統制するカントン・システムから、西欧列強がコントロールするシャンハイ・システムへの転換であった。

設問 1 文中の空欄(ア～コ)にもっとも適する語句を漢字で記入しなさい。

設問 2 文中の下線部(a～e)に関する下記の設問に答えなさい。

- a 「蘇湖熟すれば天下足る」とあるが、蘇湖の湖とは湖州を指す。それは、現在のどの省に属するのか記しなさい。
- b 明代以降、地方における地主として、その家から科挙合格者や官吏経験者を出し、その引退後は地方において社会的、政治的に指導的な役割を果たした社会層のことを何と呼ぶか、記しなさい。
- c 同郷者や同業者が異郷の地に、相互扶助・親睦のために建てた建物を何と呼ぶか、その名称を記しなさい。
- d この時の使節はマカートニーであったが、その後、1816年に北京を訪れ、貿易交渉を行おうとしたイギリスの外交官の名前を記しなさい。
- e 五港とは、広州、上海、福州、廈門のほか、どの港であったか、その名称を記しなさい。

〔Ⅱ〕 次の文章をよく読み、文中の空欄(1～10)にもっとも適する語句を記入しなさい。

「ローマは一日にしてならず」とは、長い持続的な努力なしには大事業は完成されないことの喩えだが、ローマの地中海制覇には実に長い時間を要している。その一方で、アレクサンドロスの帝国のような例もある。紀元前 334 年、ペルシア遠征を開始したマケドニア王アレクサンドロスが、ペルシアを滅ぼした後、中央アジアやインダス川流域に及ぶ大遠征を行い、バビロンに帰還し、自らが征服した大帝国を残して没したのが前 323 年であった。僅か 10 年余の間の出来事であった。

ローマはもともと 1 河畔の小都市であり、前 7、6 世紀頃は、エトルリア人の勢力下にあった。エトルリアの弱体化に伴い、前 5 世紀にはその支配から脱したとはいえ、その後も、イタリア半島内の諸部族と一進一退の戦いを進めなければならなかった。

アレクサンドロスが短期間にギリシア人の世界を東方へ一挙に拡大した頃、ローマはサムニウム人との幾度かの戦いのさなかであり、前 321 年、サムニウム人に手痛い敗北を喫している。ローマがイタリア半島をほぼ征服したのは、前 3 世紀に入ってからであり、前 275 年には、イタリアへ介入を試みたエピロス王ピュロスを退けることに成功した。

ローマが地中海における一大勢力と認められるようになったのは、第二回ポエニ戦争(前 218～201 年)に勝利した後である。ローマとの戦いに敗れ、さらにカルタゴを追われたハンニバルはシリアに逃れ、そこでローマ打倒を目指し再起を図った。しかし、シリアがローマに敗れたため、さらに小アジアに逃れたが、ローマの追及を恐れ、毒を仰いで自ら命を絶たねばならなかった。だが、当時、ローマはマケドニアにも、シリアにも戦いにおいて勝利したが、マケドニアやシリアを征服したわけでもなく、小アジアもまたローマ支配のもとにあったわけではなかった。

ローマがいよいよ、ギリシア支配に乗り出したのは、第三回マケドニア戦争に大勝した後のことである。マケドニア(ギリシア)は四分され、多くのギリシア人



がローマに連行されている。その後、第三回ポエニ戦争においてカルタゴを滅ぼし(前146年)、さらにギリシアの地をローマに併合し、ローマは地中海世界に君臨するに至る。前133年、アッタロス朝の都 2 がローマの支配下に入り、ローマの小アジア支配が始まったが、その後ポントゥス王ミトラダテス6世の激しい抵抗に遭う。第三回ミトラダテス戦争において、ミトラダテス6世を破り、彼を自害させたのは前63年のことであった。シリアがローマ領となったのは前64年、エジプトがローマに併合されたのは、さらに遅く前30年のことであった。

短期間に異質な文明にまたがる諸地域を統合したのはアレクサンドロス一身の功業であった。それゆえ、彼の死は、アレクサンドロスの大帝國を、それぞれの地域国家への分裂に結果することになった。だが、ローマは異なった。確かに、ローマはアウグストゥスの時、諸文明が交錯する地中海世界を統一する大帝國を打ち立てたが、それを可能にしたのは、数世紀の長期にわたる営為であり、その間輩出された執政官や軍事指導者の功績の積み重ねであった。

それゆえ、その後の帝政ローマにおいて、一代、二代の凡庸な皇帝の出現は、その統一を破ることはならなかった。 3 (在位54~68年)のような暴君の出現もローマを分裂させることはならなかった。

ローマは 4 (在位96~98年)から始まる五賢帝の時代に最大の版圖を擁するに至る。だが、社会構造の大きな変化と経済の停滞により、広大な帝國の統治は難しさを加えるばかりであった。3世紀における軍人皇帝の時代(235~284年)は、帝國統治の難しさを象徴するものであったが、注意すべきは、約50年間に26人の皇帝が出現したといわれるこの時期に、エピソード的な事件を除けば、ローマは分裂することはなかったことである。各地の軍團がそれぞれ皇帝をたてて抗争する事態となったといわれているが、各地の軍團が軍閥化し、自らが立てた皇帝を擁して、それぞれの地域に割拠し、各々統治するということはなかった。皇帝を次々と取り換え、傍若無人に振る舞っていたはずの軍人たちにおいてすら、そのようなことは、ローマにふさわしくなかったからである。ローマこそ文明世界であり、帝國であった。そこに、ローマのローマたる所以があり、それはさらに数世紀、あるいは一千年、ローマを生き延びさせることになった。

テオドシウス帝の死後、ローマが東西に分かれて統治されるようになったとしても、ローマは一つであると考えられていた。476年、西ローマを滅ぼしたはずの 5 も、その帝冠を東ローマ皇帝ゼノンに返し、コンスタンティノーブルの皇帝に忠誠を誓い、その権威のもとで統治を行おうとした。さらに、東ゴート王国を築いた 6 も同様に、コンスタンティノーブルの皇帝に忠誠を誓い、その代行者としてイタリア統治を行っていた。その点においては、クローヴィスに始まるメロヴィング朝の王たちも同様であった。

ローマがその後の歴史に残したものは、ローマ法とキリスト教であった。前者は法による支配として、西欧中世においても受け継がれており、後者は、ローマ教皇を中心としたカトリック教会に体现されている。

ローマの残された東部分、東ローマはその後も存続し続けた。コンスタンティノーブルの旧名、ビザンティウムから、ビザンツ帝国とも呼ばれている。ビザンツ帝国は、イスラームの勃興やトルコ諸族の侵入に耐えながら、1453年まで存続した。ローマの継続であるビザンツ世界においては、ローマ法とキリスト教は、その滅亡まで維持されていた。

ビザンツ帝国にとって、コンスタンティノーブルに近い、アナトリアに居を定めたトルコ人のなかからオスマン朝が出現したことが、その運命を決することになった。オスマン(在位 1299~1326年)からスレイマン1世(在位 1520~66年)まで、オスマン朝は10人の君主がその位を継承したが、みな英主であったともいわれている。三大陸にまたがる広大な帝国が築かれたのも、1402年の 7 の戦いや1571年のレパントの海戦における敗北からも立ち直ることができたのも、それゆえであった。1453年、コンスタンティノーブルを征服したメフメト2世は、スルタンのほか、カエサルをも称したと言われている。すなわち、彼が征服したのは堅固な城壁に守られた単なる一都市ではなかった。彼は、カエサルの称号によって、ローマを征服し、世界帝国そのものを継承したことを宣したのである。

世襲制において英主が数代続くことは稀である。また帝国が拡大化するに従い、統一を維持するのは難しくなる。オスマン朝もまた同様であった。ニコポリスの戦い(1396年)の勝者 8 (在位 1389~1402年)の即位以降、王子たち

の間で行われた王位継承をめぐる争いには、継承に成功したもの以外は、みな殺害されるという、兄弟殺しが伴うことになった。スレイマン1世以後、王子たちを宮中に幽閉する慣行が生まれたが、その後も、王位継承は依然として、兄弟殺しにつきまといわれていた。

オスマン朝の強さの象徴として、奴隷からなる歩兵軍団 9 の存在がよく知られている。兵士たちは主に、バルカン半島のキリスト教徒から少年を強制的に徴用し、イスラーム教に改宗させ、訓練・選抜したものであった。幾つもの文明にまたがる広大な帝国を形成・維持するには、多くの過酷な制度を必要としたのだともいえる。

西欧において、ローマと呼ばれる国家は、西ローマ帝国の滅亡後も、存在した。800年、ローマ教皇レオ3世がローマを訪れたフランク王カールをローマ皇帝として戴冠し、国家としてのローマの名を復活させた。クローヴィスによって創設されたフランク王国は、メロヴィング家、カロリング家によって継承されたが、王位を王の子供たちに分けることを慣行としていたため、何度も幾つかの分国に分かれる状態になっていた。カールは弟王の死により、父王の領土全体を継承することができたのである。

カールのローマ皇帝戴冠後も、フランク王国の分裂はしばしば起こった。だが、カールの後継者こそ王である、あるいはキリスト教世界の君主であるとの、王や皇帝に付せられた権威は、西欧世界に継承されたといえる。カールの王統が絶えたドイツにおいて、ザクセン公オットーにローマ皇帝への戴冠が行われたのもそれゆえであった。ローマ皇帝への戴冠により、ドイツ王はカールの継承者となったのである。後に神聖ローマ帝国と呼ばれるようになる、このドイツ人の国家は、幾多の曲折を経て、1806年にまで続く。短期間にヨーロッパを席卷しつつあったナポレオンが、1805年、オーストリア、ロシア連合軍を 10 の戦いで破り、その主導の下にライン同盟を結成したのを受け、皇帝フランツ2世が帝冠を辞したことによって、それは消滅した。

〔Ⅲ〕 次の文章(ア～エ)をよく読み、括弧(①～④)のそれぞれの語句(A～D)からもっとも適するものを一つ選び、その記号を解答欄にマークしなさい。

ア 日清戦争での中国の敗北は、「中体西用」をモットーとした洋務運動を完全な挫折に追いやるとともに、若い知識人の間では、守旧的な洋務運動のあり方を批判し、真の近代化のためには、伝統的な君主独裁という専制政治そのものの変革が必要であるという認識が広がっていった。こうした伝統的専制体制の変革と議会政治と立憲政治の樹立を目標とする近代化運動の中心となったのが、①(A 朱子学, B 考証学, C 公羊学, D 陽明学)派の康有為であった。その主張は②(A 光緒帝, B 洪武帝, C 光武帝, D 孝文帝)を動かし、保守派による妨害を押し切って政治改革を断行させたものの、これに反対する保守派が西太后を中心とするクーデターを起こし、変法派は一掃された。

このように弱体化した清朝を背景に、清末の華北一帯では、農村社会の伝統的慣習と対立する勢力となりつつあったキリスト教会が、民衆の排外運動を惹起し、教会の打ちこわしや宣教師・信徒の襲撃といった③(A 仇英, B 仇教, C 祆教, D 法難)運動と呼ばれる、反キリスト教運動となって現実化していった。このうち、山東省でのドイツ人宣教師殺害事件は、秘密結社大刀会によるものであり、さらに帝国主義列強の圧迫による政情の不安と生活の困窮が、秘密宗教・武術結社に入会する民衆を急速に増やしていった。こうした秘密結社のなかでも、白蓮教の流れをくむ義和拳は、地方官憲による排外運動に利用され、義和団として扶清滅洋のスローガンをかけつつ大挙して北上し、やがて天津や北京に迫る勢いとなった。彼らが各国公使館を包囲すると、日本・ロシアを主力とする8カ国は1900～1901年、在留外国人の保護を名目に共同出兵して、これを鎮圧した。この敗北によって清は1901年、列強との間に北京議定書、すなわち④(A 甲申, B 壬午, C 辛丑, D 戊戌)和約を締結し、巨額の賠償金や外国軍隊の北京駐兵権などを認め、中国の半植民地的な地位を決定的なものにしていった。このことは、清朝のさらなる弱体化をもたらすとともに、やがて帝政の終わりを告げる辛亥革命(1911年)へといたる、広範な民族主義運動を呼び起こすこととなった。

イ 一方インドでは、イギリスの植民地支配の下で、土着の経済発展は長く阻害されてきたものの、19世紀後半になると、綿工業を中心に民族資本の成長もみられつつあった。イギリスによる近代工業の発展とともに、インド人労働者の数も急速に増加して、待遇改善を求める動きも現れ始めていた。都市では近代教育を受けた知識人も増え、弁護士、ジャーナリスト、教育者、官僚などとして活躍し、民族意識を高めつつあった。こうした動きを懐柔すべく、イギリスは1885年、ボンベイでインド人による国民会議を開催させ、それ以来、インドでの民族主義運動は国民会議派が中心となって展開されることとなった。

こうしたなか、インド総督⑤(A ゴードン、B クライヴ、C ヘースティングス、D カーゾン)(在任1899～1905年)は1905年、ベンガル分割令を施行したが、それは民族意識のもっとも進んだベンガル州の居住地域をヒンドゥー教徒とイスラーム教徒との間で分割し、その宗教的対立を利用しつつ、民族運動激化を緩和しようとするものであった。だが、これはインド人を激怒させる結果となり、急進派の⑥(A ジンナー、B ティラク、C パネルジー、D ガンディー)に率いられた国民会議派は1906年、⑦(A ボンベイ、B カルカッタ、C ラホール、D デリー)大会でボイコット(英貨排斥)・スワデーシ(国産品愛用)・スワラージ(自治獲得)・民族教育の4綱領を採択した。だが、国民会議派は穏健派と過激派に分裂し、運動は急速に沈静化に向かうと同時に、ベンガル分割令も、イギリス国王ジョージ5世のもと、1911年に廃止された。

ウ 19世紀後半、オスマン帝国・エジプト・イランなどの西アジアでも、民族主義運動と立憲運動が展開されつつあった。オスマン帝国では、スルタンである⑧(A アブデュル=メジト1世、B アブデュル=ハミト2世、C ムスタファ=ケマル、D セリム3世)が1878年、ミドハト憲法を停止して以降も専制政治を続けた。彼は、オスマン帝国としての存続をパン=イスラーム主義に求め、イラン出身で、エジプトで活躍していた⑨(A アフガーニー、B ムハンマド=アブドゥフ、C ワッハーブ、D ムハンマド=アリー)をイスタンブールに招いたものの、それは単に帝国の一体性を維持するための道

具に過ぎなかった。1889年には「統一と進歩委員会」が結成されたが、スルタンの弾圧を受け一時パリに拠点を移しながらも、専制の打倒と立憲政治の復活を目指した。「青年トルコ」としても知られるこの政治組織は、1908年、サロニカ(テッサロニケ)で軍の反乱を組織し、ミドハト憲法の復活を要求して、スルタンはこれを認めたため、第二次立憲政が成立した。「青年トルコ」の運動は、反専制の面では一致してはいたものの、ムスリム＝トルコ人の主導による帝国の再建を主張する派と帝国内の諸民族の融和を重視する派とで対立していた。

エ またフランス領インドシナでは、ファン＝ボイ＝チャウらが1904年、維新会を組織し、ベトナムの独立回復と立憲君主制を目指す運動を繰り広げた。彼は翌年日本へ渡り、ベトナム青少年を日本へ留学させることを目的とした⑩(A サミン, B ドイモイ, C プティ＝ウトモ, D ドンズー)運動をはじめていたが、これは日露戦争がアジアの民族主義運動に与えた一つの具体的な影響の表れであった。だが、フランスの要請を受けた日本政府による迫害に遭い、3～4年で消滅していった。ファン＝ボイ＝チャウは辛亥革命の直後に、広東でベトナム光復会を組織して、フランスに対する武力闘争を試みたが、投獄などにより、十分な活動ができないままに終わっていった。

[IV] 次の文章をよく読み、下線(1～10)に関連するそれぞれの問(1～10)にもっとも適するものを(1～4)の中から一つ選び、解答欄にマークしなさい。

旅はさまざまな時代にさまざまな動機をもっておこなわれた。

古代ギリシアのアレクサンドロス大王は、前334年東方遠征に出発し、ペルシアを征服したのちギリシア・エジプトからインド西部にまたがる大帝国を建設した。古代ローマのカエサルも現在のフランスにあたるガリアへの遠征をおこなった。これらの旅は領土拡張のための戦いの旅であった。中世においては宗教的動機からの旅もおこなわれた。十字軍による聖地奪回の旅である。十字軍は所期の目的を達成できなかったが、東西の交通・交易の発達をうながし、都市や商業の発展をもたらした。

15世紀末からは帆船や航海技術の発達から、ヨーロッパ人が新大陸やアジアをはじめ、全世界へと進出していった。冒険の旅である。この海外進出は当初、スペイン・ポルトガルが中心であったが、その後オランダ、やがてイギリスとフランスが中心となった。17世紀には、信仰の自由を求めての旅もおこなわれた。イギリスで迫害を受けたピューリタンたちは、信仰の自由を求めて新大陸へと渡った。18世紀になると、貴族や富裕層がさまざまな目的で旅にでた。アダム＝スミスは、バックルー侯爵のおつきの家庭教師として1764年からヨーロッパの各地を巡る旅にでかけ、政治・経済・思想・文化など多岐にわたる刺激を受け、それをもとに『諸国民の富』を書きあげた。モーツァルトも、演奏会の開催や職を求めてヨーロッパ各地を旅した。モーツァルトの交響曲には、パリやプラハといった都市の名前がつけられたものがある。

19世紀になり鉄道が発達すると、旅は次第に庶民の娯楽となっていった。イギリスでは労働者がブルジョアを模倣して、休日に海岸地帯のリゾート施設に集まるようになった。旅の大衆化がはじまったのである。20世紀になると旅の移動手段として自動車や飛行機が用いられたが、飛行機は兵器としての開発がすすみ、やがてロケットを生み出した。ロケットは人類を月へと運ぶ宇宙旅行の時代を実現させたが、同時に、核弾頭を搭載した核ミサイルは全人類の脅威となっている。

問 1 下線部 1 に関連して、ヘレニズム時代に関する次の文章のうち、誤っているものを選びなさい。

- 1 アレクサンドロス大王の死後、帝国はディアドコイとよばれる部下の將軍たちによって分割された。
- 2 アンティゴノスがマケドニア王位についた。
- 3 コイナーとよばれるギリシア語が共通語となった。
- 4 ダマスクスに王立研究所ムセイオンがつくられた。

問 2 下線部 2 に関連して、中世の都市と商工業に関する次の文章のうち、もっとも適切なものを選びなさい。

- 1 北ドイツではハンブルク・リューベック・フランクフルトなどの都市が栄えた。
- 2 北イタリアでは司教権力を倒して帝国都市とよばれる自由都市が誕生した。
- 3 ドイツでは荘園を脱出した農奴が、都市にのがれて 1 年と 1 日住めば自由な身分になるとされた。
- 4 ツunft 闘争によって商人ギルドと対抗しつつあった同職ギルド(ツunft)は、営業の自由を獲得し、自由競争のもとでの市場経済の発展に寄与した。

問 3 下線部 3 に関連して、スペイン・ポルトガル・オランダの海外進出に関する次の文章のうち、誤っているものを選びなさい。

- 1 スペインはフェリペ 4 世時代にフィリピンを領有した。
- 2 1517 年、ポルトガルは広州で明と通商をひらいた。
- 3 1623 年、オランダはモルッカ諸島のアンボイナ島でイギリス商館員(雇用日本人を含む)多数を虐殺し、イギリス勢力を一掃した。
- 4 1652 年、オランダ東インド会社はケープ植民地をきずき、アジア進出の拠点とした。



問 4 下線部4に関連して、イギリスとフランスの海外進出に関する次の文章のうち、誤っているものを選びなさい。

- 1 フランスのインド総督デュプレクスは、1746年以降、一時インドでイギリス軍を窮地に追い込んだが、1754年、本国に召還された。
- 2 フランスは、七年戦争とフレンチ=インディアン戦争とよばれるイギリスとの植民地戦争の講和条約である1763年のパリ条約で、北アメリカにおける領土をすべて失った。
- 3 イギリスはインドでの地税徴収にあたり、政府と農民を仲介するものに徴税をまかせ、その仲介者に土地所有権をあたえるザミンダーリー制や、農民に土地保有権をあたえて農民から直接地税を徴収するライヤットワーリー制などを実施した。
- 4 1858年、ムガル皇帝の流刑によってムガル帝国が滅亡したため、イギリスは同年、東インド会社を解散して直接統治にのりだし、同年よりヴィクトリア女王がインド皇帝を兼ねるようになった。

問 5 下線部5に関連して、キリスト教に関する次の文章のうち、もっとも適切なものを選びなさい。

- 1 ジュネーヴ生まれの人文主義者カルヴァンは、『キリスト教綱要』で福音主義をとなえ、魂の救済はあらかじめ神によって決定されているという「予定説」を説いた。
- 2 1620年、ピューリタンの一団(ピルグリム=ファーザーズ)がメイフラワー号でポーツマスに渡り、イギリスのニューイングランド植民地の基礎をつくった。
- 3 ネーデルラントのカルヴァン派の呼称であるゴイセンは、「乞食」という意味である。
- 4 フランスではアンリ2世と母親の摂政カトリーヌ=ド=メディシスのもとでユグノー戦争が勃発した。

問 6 下線部 6 に関連して、経済学者に関する次の文章のうち、誤っているものを選びなさい。

- 1 フランスの重農主義経済学者のテュルゴーは、ルイ 15 世のもとで財務総監として財政再建に努力したが失敗した。
- 2 イギリスの古典派経済学者のマルサスは、産業革命が進行中の 18 世紀末に『人口論』を刊行した。
- 3 ドイツの歴史学派経済学者のリストは、おくれた発展段階にある国民経済は国家の保護を必要とするとして保護貿易主義を主張し、関税同盟の結成に尽力した。
- 4 ドイツ生まれのユダヤ人であるマルクスは、唯物史観にもとづいて資本主義の矛盾を解明し、マルクス経済学を確立した。

問 7 下線部 7 に関連して、パリに関する次の文章のうち、誤っているものを選びなさい。

- 1 神学で有名なパリ大学を模範にして、イギリスにオックスフォード大学が創設された。
- 2 1855 年、ナポレオン 3 世は国威発揚のため、パリで万国博覧会を開いた。
- 3 パリは第二帝政期にオスマンにより大改造された。
- 4 パリ＝コミューンは、王党派のティエールを首班とする政府によって鎮圧された。

問 8 下線部 8 に関連して、1960 年代の東欧諸国でのソ連批判に関する次の文章のうち誤っているものを選びなさい。

- 1 アルバニアは 1961 年、中ソ論争で中国を支持したため、ソ連との関係が途絶した。
- 2 石油資源をもつルーマニアは、チャウシェスクのもとでソ連の外交政策に批判的な独自の外交を展開した。
- 3 1968 年、チェコスロヴァキアの共産党第一書記ドブチェクは、自由化を推進しようとしたが、ソ連とワルシャワ条約機構 8 カ国軍の軍事介入により阻止された。
- 4 1968 年、ソ連はチェコスロヴァキアへの軍事介入を正当化するため、「制限主権論」を柱とするブレジネフ＝ドクトリンとよばれる外交方針を発表した。

問 9 下線部 9 に関連して、鉄道に関する次の文章のうち、もっとも適切なものを選びなさい。

- 1 1825 年、マンチェスター・リヴァプール間で世界最初の鉄道が開通した。
- 2 シベリア鉄道の東の終着駅ウラジヴォストークは、1860 年の北京条約でロシアが中国から獲得した沿海州にある。
- 3 1868 年、アメリカでは最初の大陸横断鉄道が完成し、1890 年代にはフロンティアが消滅した。
- 4 1895 年、日本は下関条約で遼東半島を獲得し、東清鉄道の敷設権をえた。

問10 下線部 10 に関連して、核拡散防止についての次の文章のうち、もっとも適切なものを選びなさい。

- 1 1954 年 3 月の第五福竜丸事件を機に、同年 8 月、第 1 回原水爆禁止世界大会が広島で開催された。
- 2 1957 年のパグウォッシュ会議で、人間と科学と知性の名において核兵器・核戦争の危険性を訴えたラッセル・アインシュタイン宣言が発表された。
- 3 1963 年、米ソ間で大気圏内外水中核実験停止条約(部分的核実験停止条約)が調印され、68 年には 62 カ国が核拡散防止条約に調印した。
- 4 1969 年から米ソ間で、第 1 次戦略兵器制限交渉がはじまり、73 年には両国間で核戦争防止協定が結ばれた。

〔V〕 14 世紀の黒死病(ペスト)がイギリスの封建制にあたえた影響について、3 行以内で説明しなさい。







